現代批評文学論

――方法と実践

赤祖父哲二著

中教出版

現代批評文学論

——方法と実践

赤祖父哲二 著

中教出版

現代批評文学論　©1979

昭和54年2月10日　初版発行

定価　2000円

著者　赤祖父　哲　二

発行者　中教出版株式会社
代表者　木村茂夫

印刷者　株式会社　柳沢印刷所
代表者　柳沢一郎

著者との申し合わせにより検印は省略します

発行所　中教出版株式会社
〒101　東京都千代田区西神田2―3―16
☎　東京(03)263―1351／振替口座　東京2-16483

3096-680131-4646　〈乱丁・落丁本はお取りかえいたします〉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　英米批評史――二〇世紀概観
一　モダニズムの開花　9
二　一九三〇年代――両極分離　19
三　第二次大戦後――巨大機構と大衆社会　29
四　詩的言語の本質へ――理論の深化　36
第二章　新批評の方法とその適用
一　批評の方法とは　47
二　適用例――『横しぐれ』　59
三　適用例――『徒然草』　71
第三章　批評言語への自覚
一　エリオットの批評用語論　87
二　リチャーズ、エンプソン、ブルックス　98
三　シカゴ新アリストテレス派　110

四　ウェレック、ウィムサット、バーク　119
五　「構造」と「フォーム」　127
六　結語——言語批判　135

第四章　現代におけるレトリックの再生
一　メディア論とレトリック　151
二　レトリックの歴史　157
三　リチャーズのニュー・レトリックほか　163
四　ケネス・バークのニュー・レトリックほか　169
五　日本におけるレトリック　179

第五章　小説論——「こと」と「もの」の統一
一　語りの息づかい、肉声　193
二　詩における声　199
三　ブースのレトリック遍在論　206
四　小説論の系譜——瞥見　214

五　相互主観性と多声的構成　220
六　文章空間の構造　231
七　小説の袋小路と甦りの可能性　240

第六章　七〇年代の状況
一　一九七五年——失われたコンセンサス　253
二　「ニュー・ライターズ」の評価をめぐって——フィクション概念の転換　258
三　「文学の死」　265
四　文化論の深化　271

終章　回想的まとめと展望　287

あとがき　293
索引（主要な人名と著作）

(人名や書名の原語は、巻末の索引を参照のこと。本文中の『 』は単行本、雑誌など、〈 〉は論文、単行本の一章、短篇小説、詩などの一篇を示す。( )内の数字は発行年をあらわす。引用文中の(……)は、引用者による省略を示す)

第一章　英米批評史——二〇世紀概観

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　モダニズムの開花

英米にかぎらず世界全体において、文学批評は二〇世紀とともに華麗といえるほどの隆盛と多様化を見せた。それだけに、何をもって「批評」というかと問われれば、人はその領域と機能の広がりにとまどうであろう。「批評の時代」などといわれながら、あんがいその核心は明らかにされていない。

自律したジャンルとしての「文学批評」には、まずジャーナリズムの文芸誌を中心とした活動がある。イギリスの『アセニアム』(一八二八―一九二一)や『サタディ・レヴュー』(一八五五―一九三一)、アメリカの『ノース・アメリカン・レヴュー』(一八一五―一九三九)などにかわって、多くの指導的文芸誌が創刊され、職業批評家を生み、時代の知的雰囲気を盛りあげるうえで大きな役割を果たした。主なものとしては、イギリスでは『クライテリオン』(一九二二―三九)、『ロンドン・マーキュリー』(一九一九―三九)、『タイムズ文芸付録』(*TLS*, 一九〇二―　)、アメリカでは『ニュー・リパブリック』(一九一四―　)、『パーティザン・レヴュー』(一九三四―　)である。

第二に、『スクルーティニー』(一九三二―五三)や『ケニオン・レヴュー』(一九三九―七〇)に代表されるような、大学を根城として刊行される雑誌がふえ、多数の学者批評家を輩出させ、大学の講座に現

代文学が取り入れられ、いわゆる評論と研究が相互に刺激し合い、かなりの成果をあげた。古典研究中心の文献学にも、新しい方法が注入された。また、第二次大戦後に盛んとなった地域研究にも文学研究が参加し、みずからの視野を広げた。何よりも、批評の学的な拡大と精密化がもたらされたといえる。

このことを、活動舞台でなく内容の面から眺めると、まず、(1)社会的行為としての文学の働きが、今までになく強く主張された。(2)人間のほの暗い深層心理の探求が、また近代を遠く超えた原初への誘いが、文学批評のなかへ導入された。(3)この精神分析学と文化人類学という新興科学から王座を奪回しようとするかのように、哲学が文学や芸術の理論の核たろうとした。カッシーラー、ホワイトヘッド、ランガー、デューイらの影響は大きい。さらに、(4)一般意味論や記号学にはじまる言語科学の発展によって、測り知れない衝撃を与えられた。

また、(5)とくに詩と批評において、エズラ・パウンドやT・S・エリオットに代表されるように、英米の相互交渉が盛んとなり、アングロ・アメリカ圏とでもいいうる共通の地盤が形成された。さらに(6)アメリカの知的世界は第二次大戦前夜より、多数の亡命知識人をヨーロッパから受けいれ、国際政治と経済にたいする影響力とあいまって、西欧をしのぐ主導力を担うこととなった。

このように、文学批評は半世紀以上にわたる曲折のなかで、社会参加の厳しい体験、審美的な言語分析、象徴言語の探求などをへて、文学言語の本質とは何か、現代文明における文学の役割は何か、という常に古くて新しい問いにたいして、究極の答えを出すようせまられている。

批評活動の理想的な姿としては、時代の趨勢や創作の動向に根をおろしつつ、たえず文学理論の純化

を志向し、作品の評価という実践を豊かにするばかりか、ほかの芸術ジャンルや隣接諸学と生き生きした関係を保たなくてはならない。

しかし、このような欲深い業は、社会組織の複雑化やマスメディアの発達のなかにある文学自身が、生きのびてゆくためのあがきなのかもしれない。とすれば、一九世紀中葉にマシュー・アーノルドがはじめて定義づけた存在である、時代精神の先導者としての批評家は、すでに時代錯誤の代物なのか。一介のスペシャリスト（管理社会における知識人の役割を定める流行語）にすぎなくなるのか。

だが、これこそ、「批評の時代」と呼ばれる今世紀が突きつける問いであって、このような文学の自己防禦や自己主張こそ批評である、と逆に定義し直すことはできるのではないか。文学批評とは、単なる作品の分析術ではなく、文学意識の自覚的なあり方そのものだといえよう。

＊

さて、普通の文学史は、主として勝利の側から見た歴史であって、いわば陽の面に多くの光が与えられやすい。だが、歴史は陽（正）と陰（負）の葛藤の軌跡ではないか。たとえば、絵画に革命的な変化をもたらした印象派以降の画家たちが、はじめはアカデミズム派から、どんな扱い方をされたか。このことは、とかく忘れられやすい。

今日から眺めると二〇世紀前半のイギリス文学を一人占めしているかにみえるジェイムズ・ジョイス（一八八二―一九四一）、T・S・エリオット（一八八八―一九六五）らの主知派といえども、はじめから読書界に心よく迎えいれられたわけではない。いわゆる実験的な作品が出たのは、二〇年代に入ってから

である（『ユリシーズ』、『荒地』、『ジェイコブの部屋』はともに一九二二年刊）。

いうまでもなく、一九一〇年代には第一次大戦とロシア革命が世界を震撼させ、とくにヨーロッパには時代を画する衝撃を与えた。それまでは、「エドワード時代」などと国王の名にちなんだおとなしい時期であり、H・G・ウェルズ（一八六六—一九四六）、アーノルド・ベネット（一八六七—一九三一）、ジョン・ゴールズワージー（一八六七—一九三三）に代表されていた。この三人について、ヴァージニア・ウルフ（一八八二—一九四一）が、文明の進歩という安易な夢に寄りかかる物質主義者と呼び、毒づいたのは一九二五年のことである（『ありふれた読者』）。

『荒地』が知的な若者を魅了し去ったとはいえ、かなり激しい非難も浴びたことは忘れてはならない。エリオットがイマジズムの詩誌『エゴイスト』（一九一四—一九）の副主筆をへて、『クライテリオン』を主宰しパリとの交流によって新しい雰囲気を盛りあげるまでには、それなりの苦闘があったのである。最初の評論集『聖林』（一九二〇）も、とくに人気を得たわけではなかった。

ジョイスの苦しみは、はるかに惨憺たるものであり、その経歴こそ文学史の陰と陽との転換を示してあまりあるといえる。『ダブリンの人びと』（一九一四）は、出版までに一〇年の屈辱にあったし、『若き芸術家の肖像』（一九一六）はエズラ・パウンド主筆の世話で『エゴイスト』に連載された。しかも、単行本になったのは、アメリカが最初である。また、『ユリシーズ』がアメリカの前衛文芸誌『リトル・レヴュー』（一九一四—二九）に連載されはじめるや、焼き打ちや罰金刑にあったばかりか、単行本になるとたちまち英米で即時発売禁止になった受難は、あまりにも名高い。

D・H・ロレンス（一八八五―一九三〇）も同様な憂目にあっており、この時代の不安定さを示している。すなわち、一九一五年刊の『虹』は卑猥のかどで発禁となり、彼自身も住居地から追い立てをくう。高名な文芸批評家レズリー・スティーヴンズ卿（一八三二―一九〇四）を父にもち、高踏的な知的グループのブルームズベリー派の一員であったヴァージニア・ウルフは、例外的に恵まれていたのである。この彼女といえども、はじめはありきたりの作品を書いていた。

ともかく、このような状況にもかかわらず、一九二〇年以降のイギリス文学は、小説・詩・批評のいずれにおいても未曽有の活動期を迎えた。一言でいえば、数世紀にわたってゆらぐことがないと思われてきたヨーロッパ近代文明にたいする危機感に根をおろした、大胆な知的冒険――モダニズム――の開花であった。

まずエリオットは、〈伝統と個人の才能〉、〈形而上詩人〉、〈批評の職能〉などの画期的なエッセイにおいて、詩の実作者としての感受性に基づきつつ、ジョン・ダンの再評価という一大変革をもたらす。アーノルドの「教養」（culture）に代わって、全ヨーロッパ的な広がりをもつ重層する歴史の重み――「伝統」――という概念を前面に押し出したのである。

このような知的風潮の変化は、アメリカ育ちのパウンドやエリオットだけによってもたらされたのではない。人間の無限な知力などを信ずることをやめた懐疑の精神は、すでに人知れず第一次大戦前にT・E・ヒューム（一八八三―一九一七）によって形をなしていたのである。死後出版の『思索論集』（一九二四）において、フランスの哲学者ベルグソンやドイツの美学者ヴォリンガーの思想を吸収しつつ、

ルネサンス以降の人間主義（Humanism）を否定し、みずからの主張を新しい古典主義と名づけていた。

モダニズムの定着にとって柱となった思想には、「伝統」や「古典主義」のほかに、もう一つ「無意識」という概念がある。いうまでもなく、フロイトやユングからの衝撃であり、イギリスでは、フロイトの『夢の解釈』（一九〇〇）が一九一一年に英訳され、ロレンスが『精神分析と無意識』（一九二一）という評論を、またハーバート・リード（一八九三—一九六八）が〈精神分析学と批評家〉（一九二五、『クライテリオン』）を発表したように、たちまち浸透をはじめた。

モダニズムのもう一つの柱は、言語の象徴力の分析であった。一七世紀に思考と感性の分裂がはじまったというのは、エリオットの名高い嘆きであるが、この分裂以前にあった（とされる）言語の豊かなイメージ喚起力が、モダニストたちにとって魔法の扉を開くアリアドネの鍵となったのである。

I・A・リチャーズ（一八九三—　）がこの道の先駆者であり、C・K・オグデン（一八九九—一九五七）との共著『意味の意味』（一九二三）において、従来の美学が大前提としてきた実体としての「美」の理念をしりぞけ、美とは感覚的刺激の組織化なりとする伝達論をきり開いた。これは、言語には正確な指示のための記号的用法と詩的情緒をさそう喚情的用法があるという、いわば科学—詩の二分法によっており、科学技術の大攻勢にたいする、心理学や記号学に基づく屈折した詩の弁護であったといえる（P・B・シェリー『詩の弁護』一八四〇、参照）。すべての問題は言語に帰するという認識を、言語を素材とする文学の批評に導き入れた功績は測り知れないものがある（『文芸批評の原理』一九二四、『科学と詩』一九二六、『実践批評』一九二九）。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com